

「多文化共生」社会を考える

－「世界史A」の授業を通じての人権学習について－

県立高円高等学校 教諭 吉村 典久

Yoshimura Norihisa

要 旨

世界史の学習は、その内容自体がまさに「異文化理解」である。しかし、日本社会は「異文化理解」だけでは不十分な状況に今日置かれている。外国人登録者数が200万人を突破し、「多文化共生」社会が現実味を帯びてきた。生徒たちがこのことを実感し、自己の生き方に結び付けていくことができる学習活動について研究した。

キーワード： 世界史A、多文化共生、主体的な学習、人権学習

1 はじめに

本校では、第2学年において「多文化共生」を目指す意識を育てる人権教育ホームルームを行っている。その内容はアイヌ問題についての学習や在日韓国・朝鮮人問題についての学習が主体であり、特に北海道修学旅行にともなうアイヌ問題についての学習への生徒の意識は高い。しかし、この学習で学んだことを生徒の心に定着させるには、日ごろの授業においても「多文化共生」を目指す学習がなされなければならない。しかもそれは異文化理解を基礎としながらも、人権意識を育成することにつながるものである。多文化共生の経験が乏しい日本社会においても、これからは民族・文化的に異なる多様な人々との出会いや生活を、当たり前のものでとらえられるようにならねばならない。ここでは「多文化共生」社会を考えるために、世界史Aの授業を通じた人権学習の可能性を探った。

2 研究目的

「多文化共生」社会を考えるために、世界史Aの授業を通じて人権意識を育成する学習の在り方を研究する。

3 研究方法

- (1) 本校における人権教育の課題と分析
- (2) 世界史Aの学習を通じての人権意識の育成

4 研究内容

- (1) 本校における人権教育の課題と分析

本校では、第2学年を中心に「多文化共生」をテーマとする人権教育ホームルームを行っている。1学期は、アイヌ問題について3回のホームルーム活動を実施している。これは6月末の修学旅行におけるアイヌ文化を考える学習と結び付けるためである。修学旅行と結び付いていることで、遠い北海道を中心とした地域の問題を、身近な人権問題として考えることができる。現に本年度の第2学年の生徒は、バスガイドからのアイヌ問題についての説明にもよく反応していた

ということであった。そういった面ではよい取組であるが、修学旅行が終わると同時に思い出と化してしまう可能性もはらんでいる。2学期については、これも3回のホームルーム活動で在日韓国・朝鮮人問題を中心に、在日外国人問題について学習している。しかし、もう一步踏み込んだ、ニューカマーの問題への展開がほとんどないのが現状である。アイヌ問題にしても、在日外国人問題にしても日々の暮らしのなかでもっと実感できる取組が課題であると考えている。

(2) 世界史Aの学習を通じての人権意識の育成

高等学校学習指導要領の世界史Aの目標に、「国際社会に主体的に生きる日本人としての自覚と資質を養う」とあるように、世界史Aの学習自体が「異文化理解」に通じるものである。また「人権教育の指導方法等の在り方について〔第二次とりまとめ〕」（文部科学省平成18年）にも、教科指導を通じた人権教育の必要性が述べられていることから、人権意識を育成する世界史Aの学習について授業実践を通して考えたい。

ア 夏休みの課題

世界史Aの学習は「異文化理解」であるということは、4月の第1回目の授業において最初に生徒に伝えた事柄である。そして「異文化理解」から「多文化共生」社会の実現を目指す学習への展開を考えた。そこで2学期の学習の導入として、夏期休業中に調べ学習の課題を与えた。課題の内容と調べてきた生徒の人数は表1のとおりである。

表1 夏休みの課題と提出人数

	テーマ	人数
1	朝鮮の伝統文化	8
2	台湾の先住民族	10
3	ロシアの東進とアイヌ民族	2
4	オーストラリアの歴史とアボリジニ	2
5	アメリカのフロンティア開拓とインディアン	2

イ 授業展開

生徒の発表を中心に授業を組み立てた。後掲の指導案はその授業のものである。夏休みのレポートを基にして5人の生徒が2グループに分かれて発表した。

(ア) 生徒発表①（写真1）

単元「中華世界の再編」のなかで、漢民族の台湾侵入についての授業を展開した。明末の混乱期における台湾の様子について2名の生徒が発表を行った。特に、16世紀末からのオランダによる植民地支配の内容や漢族を率いてオランダから台湾を解放した鄭成功についてよく調べていた。世界史Aの授業として、教科書に即した歴史的事実を押さえる内容の発表であった。また人権学習としては、多数派であった原住民が少数派に転落した事実をとらえ、多数派本意社会の問題点を考える効果があった。



写真1(生徒発表①)



写真2(生徒発表②)

(イ) 生徒発表② (写真2)

現代の台湾社会を考えるために非常に効果的な発表であった。3人の生徒が台湾における原住民の分布地図や原住民への近年のイメージの変化などについて発表を行った。そのなかで「漢族と原住民がさまざまな良い面と悪い面を併せもちながらも共生している」という発表は、現代日本社会の問題点にもつながる内容である。授業の中で考えていかなければならないものと思う。発表という面では、両発表とも生徒が慣れていないこともあり、発表する方も聞く方ももっと回数を重ねていかなければならないと感じた。

(ウ) 班学習 (写真3～6)



写真3(プレート)



写真4(班学習)



写真5(班発表①)



写真6(班発表②)

授業の後半は、外国人登録者について、その全体の人数と国籍別登録者数1位から6位までを班で考えた。具体的な数字や国名を出すことで日本社会の現状を実感するのがねらいであった。授業ではこの班活動が最も盛りあがりを見せた。写真3のプレートは、薄い発泡スチロールを切って簡単に作ることができ、これからの授業でもいろいろと活用できそうである。

5 研究結果と考察

「多文化共生」社会実現に向けた日本社会の取組は、まだまだ始まったばかりである。そのような状況であるが、現代の生徒たちは幼いころから学校や社会のなかで様々な文化に触れる機会が多い。そう考えると、われわれ教員の方が教えられることも多いのではと思うときがある。今回のような「多文化共生」をテーマとした学習は、われわれ教員自身にもよい影響を与える。

国境を越えた人・モノ・情報の動きはものすごいスピードで変化している。年々移り変わる社会の様子と問題点を生徒と共に考えていくのは地歴公民科教員の宿命である。今回のテーマは、地理や現代社会でも取り上げることができるかもしれないが、歴史学習で取り上げたのはつながりを重視したためである。長い歴史のなかで、よく似た事例を検証して現代に生かすことは重要である。

何百年、何千年も前の事柄が現代の問題の原因であることも少なくないからである。

夏休みの課題として生徒が提出したレポートは、自由にテーマを選択させたものではない。5つのテーマに絞って選択させた。わたしは、修学旅行の思い出もあるから、おそらくアイヌ問題について多くの生徒がレポートしてくるであろうと思っていた。次に多いのが朝鮮の伝統文化についてではないかと。しかし、実際は違った。台湾原住民についてのものが最も多かったのである(表1)。これは意外であった。きれいにカラー写真を貼り付けた努力作品もあった。習ったことのない新しいテーマを彼らが求めている証拠なのかもしれない。その意味では彼らは好奇心旺盛な国際人であるかもしれない。

また5名の生徒が2グループに分かれ、発表をした。放課後残ってレジュメを作ってくれた努力には頭が下がる。また班学習では全員が真剣に取り組んでくれたと思う。特に日本の外国人登録者数を国別に並べる問題では、盛りあがりを見せた。全てに正解した班はなかったが、「韓国・朝鮮」と「中国」を1位と2位にあげていたのには、何か救われる思いがした。しかし実際に「多文化共生」が叫ばれはじめたのは、第3位以下の国々からのわが国への人の移動が増えたからに他ならない。そういった点を生徒と共に考えることができたのは良かった。やや盛りだくさんの内容であったが、世界史の新たな面が出せたのではないかと思えるし、生徒自身も主体的に学ぶことの大切さと面白さを実感できたのではないかと考える。

このように世界史Aの学習を通じた人権学習の在り方を研究した。前述した「人権教育の指導方法等の在り方について [第二次とりまとめ]」に各教科等における指導内容の例があるが、世界史Aについては触れられていなかったので、一つの例を示すことができたと考えている。

6 今後の課題

「多文化共生」社会という、避けては通ることのできない時代が始まっている。今後も日本社会で生活をする外国人は増え続けるであろう。それをあたり前のこととして、互いの文化を尊重し認め合うことは一人ひとりの幸せという点では重要な要素である。母語教育を整えば、休み時間になると教室のあちこちで様々な国の言葉が飛び交うようになるかもしれない。これからも生徒自身が、主体的な学習を通して未来の社会を考えることができる授業の工夫を重ねていきたい。

参考文献

- | | | | |
|------------|--------------|---------|-------|
| (1) 若林正文 | 『台湾』 | ちくま新書 | 2001年 |
| (2) 伊藤 潔 | 『台湾』 | 中公新書 | 2003年 |
| (3) 亜洲奈みづほ | 『台湾に行こう!』 | PHPエル新書 | 2003年 |
| (4) 梶山憲一 他 | 『台湾』 | 国土社 | 2002年 |
| (5) 法務省 | 『日本の外国人登録者数』 | | 2006年 |

世界史A学習指導案

授業者 県立高円高等学校教諭 吉村典久

1. 日時・場所 2006年 11月17日(金) 1限(8:50~9:40)
2. 学年・組 普通科、2年1組(世界史A選択生徒) 29名(男子9名、女子20名)
3. 使用教材 教科書「要説世界史」(山川出版社)
レジュメ(生徒夏期レポート・法務省2006資料)
4. 単元・領域名 第2章 一体化に向かう世界(I) ①中華世界の再編
5. 単元・領域の目標
 - ・漢民族国家を復興した洪武帝の皇帝権強化と永楽帝の対外積極策に注目し、明が世界帝国の樹立をめざしたことを理解する。
 - ・清朝は中国の伝統文化を尊重しつつも、征服民族としての厳しさをもった政策を行ったことを理解する。
 - ・明清時代の経済発展と海外貿易の拡大がもたらした変化を、広く東アジア全体の視点からとらえる。
6. 生徒観 全体的におとなしい生徒が多い。しかし意見を求めたときにはきちんと述べる
ことができる者も多く、主体的に学習できる下地は十分にある。
7. 単元・領域の指導計画(3時間)
 - 第1時 東アジア諸地域の再編と明の盛衰
 - 第2時 女真族の自立と清の中国統治(本時)
 - 第3時 明・清時代の社会と文化
8. 本時の目標
 - ・康熙帝による中国統一のなかで台湾の支配をとらえ、台湾の歴史について学習する。(オランダの台湾支配から鄭成功の反清復明運動、鄭氏台湾の成立など)
 - ・台湾の原住民が漢民族の流入で多数派から少数派に転落した事実を理解し、多数派本位の社会について考える。また現在の台湾社会と日本社会について考える。
 - ・発表や班学習を通して主体的に学ぶ力を身につける。
9. 単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断	資料活用の技能・表現	知識・理解
アジア史のなかではあまり取り上げられない台湾の歴史や人びとに関心をもち、多文化共生社会について意欲的に考える態度をもっている。	漢民族の台湾侵入から始まった多数派漢民族と少数派原住民という状況を把握し、現在の日本が抱えている問題について考察することができる。また、多文化共生社会について考察することができる。	資料を活用し、考察した事柄をグループで発表することができる。また班学習において自分の意見を述べることができる。他の生徒の意見を聞き、自分の意見を対比させながらまとめることができる。	漢民族の侵入が原住民を圧迫したことを理解し、現在の台湾社会と日本社会の問題点が共通したものであることが理解できる。また、基本的な歴史的事実や人名などを理解し覚えることができる。

10. 本時の評価規準
- ・台湾の歴史を理解することを通じて、多数派本位の社会について考えることができる。
 - ・班学習において自分の意見を述べることができる。他の生徒の発表や意見を聞き、自分の意見を対比させながらまとめることができる。
11. 本時の評価方法
- ・観察による評価（発表・班での活動）
 - ・ワークシートの作成（班学習）
12. 授業展開過程

時 間	学習活動	指導上の留意事項	備考
導入（5分）	・明朝の滅亡と清の中国統治についての発問に答える。	・明朝の滅亡は、漢民族の中国支配の終わりを意味することを確認する。	班学習の形態をとる。
展開（35分）	<ul style="list-style-type: none"> ・康熙帝の中国統一のなかで、はじめて台湾が中国の領土になったことを捉える。 ・台湾に焦点をあて、明末期から清朝前期の台湾支配の様子について発表を聞き、学習する。（オランダの支配から鄭成功の支配康熙帝の統一） ・現代の台湾の気候・風土・人びとについて学習する。 ・現代の台湾社会における原住民と漢民の状況について発表を聞き、学習する。 ・日本社会に目を向け、増加し続ける外国人登録者について班で考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・板書し、解説する。 ・台湾についてテーマ学習を行うことを確認する。 ・生徒の発表の補足 ・それまで多数派であった原住民が少数派に転落したことを確認する。 ・以後の台湾の歴史について簡単に説明する。 ・地理的な確認をする。 ・生徒の発表の補足 ・原住民と漢民が共生していることを確認する。台湾社会の様子を日本社会につなげていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒発表① 「オランダ、鄭成功の台湾侵入と清朝の支配」 ・生徒発表② 「現代の台湾社会」 ・班でクイズに答える
まとめと次回の授業に向けて（10分）	・ワークシートを班で記入する。班の意見を集約し、発表する。	・現在の台湾社会と日本社会の共通点を考えさせ、問題点を克服するためにはどうしたらよいかを考えさせる。	・資料「日本の外国人登録者数」（2006. 5. 31法務省）